

小・中学校の円滑な接続を通し 9年間で一定の力を育む

白梅学園大子ども学部教授／白梅学園大大学院子ども学研究科研究科長 無藤 隆

小中接続への関心が高まっている。白梅学園大の無藤隆教授は、今後、教育の質を保障する上で、小・中学校を連続した「義務教育期間」として捉え、9年間を通じた教育の成果を考える必要性を強調する。

小中接続が求められる背景

小・中学校の期間の長さや 9年間のつながりに課題

義務教育である小・中学校では、9年間を通してすべての子どもに一定の力を付ける必要があります。この点が、義務教育でない故に多様性に富む高校教育との役割の違いです。ところが、現実には、9年間を通じて義務教育に求められる力を完成することが、難しくなっています。その背景となる課題を3点に整理してみましよう。

1 点目は、各学校段階の期間の適切さです。小学校については、発達段階から見て思春期

小学校教育では、指導内容の量の増加や質の高まりにより、特に高学年で教科内容の専門性が求められます。専科の教師を増やすことは有効ですが、小規模校化が進む中で容易ではありません。中学校でも、小規模校を中心に専科の教師の確保が困難になっていくでしょう。

このような課題改善のために、小中接続が求められているのです。

小中接続のポイント

情報共有や人事交流を通し 指導に連続性を持たせる

ここ数年、小中接続への意識が高まり、ほとんどの学校が何らかの試みを始めています。接続の効果をより高めていくためには次の点が重要です。

①カリキュラムを調整する

小・中学校の教師が互いの学習指導要領に目を通し、加えて、実際の授業の本身も知ることが大切です。例えば、「総合的な学習の時間」は、学習指導要領に具体的な学習内容は書かれていません。小・中学校で重複しないよう、内容を把握することが必要です。

②指導方法の違いを理解する

小学校は子どもの発言や話し合いを生かしてきめ細かく指導すること、中学校は各教科

にさしかかる高学年と、幼児に近い低学年を、一つの枠組みで指導します。その難しさを考えると、6年間は長すぎるのかもしれませんが。一方、中学校は、学力基盤の完成と受験指導を両立させつつ、生徒指導や部活動指導にも時間を割く必要があり、3年間は短すぎると思います。

2 点目は、小・中学校での学習の進め方や指導方針の違いが大きいこと、そして小中接続の際の指導に非効率な点があることです。小・中学校での学習サイクルの変化に子どもが対応できなかつたり、小学校での学習内容の復習に、中学校で多くの時間を割いたりしていることがあると思います。

3 点目は、教師の人事の問題です。今後の

現在と未来をつなぐ小学校教育

むとつ・たかし◎お茶の水女子大生活科学部教授などを経て現職。専門は発達心理学、教育心理学。第6期中央教育審議会委員、同初等中等教育分科会教育課程部会長などを務める。著書に『現場と学問のふれあうところ』教育実践の現場から立ち上げる心理学（「新曜社」など）。



の専門的な部分まで指導することを重視します。子どもの戸惑いを大きくしないために、互いの違いを理解し合うことが大切です。

③子どもの実態を共有する

中学校は教科担任制ですから、学級担任が子どもと接する時間は短くなります。そのため、小学校との間で個々の子どもに関する情報が共有されていなければ、実態把握に時間がかかり、支援が遅れてしまいます。小学校が「学習カルテ」のような形で子どもの学習や生活の状況を中学校に細かく伝えることは、一つの有効な手段です。

④学習内容・習慣の定着を連続して考える

学習内容の多い中学校で、必要以上に小学校の学習内容の復習に時間を割くことがないよう、小学校の最後に必ず総復習をしておく

など、小・中学校で学習内容の定着のさせ方を協議することが必要です。また、中学校では、家庭での自主学習が小学校以上に求められます。小学校高学年から、こうした学習スタイルを徐々に取り入れるなど、段差を小さくする工夫が求められます。

⑤人事交流を活発にする

生活指導も同様です。小学校は服装や髪型は比較的自由ですが、中学校は校則で規定されます。子どもが指導方針の違いに戸惑うことがないように、伝え方を考えましょう。

⑥人事交流を活発にする

小・中学校間での人事交流を含む人事交流の活発化には、人事の効率化のみならず、授業の質を高める効果も期待できます。例えば、中学校の英語教師が小学校の外国語活動の指導に入れば、教師にとっては小学校の実態がつかめ、子どもにとっては専門性の高い授業を受けられる良さがあります。同様に、他教科でも中学校の専科の教師に指導に入っても、例えば、小規模校でもさまざまな専門の教師を集めることが出来ます。中学校とのつながりのある指導がなされることも良い点です。

校長先生への期待

互いを認め合うことから
相互理解を深めていく

小中接続は、意識的・物理的な両面が揃っ

ポイント

- 義務教育期間として、小・中学校の9年間を通じて一定の力を付けるために小中接続が必要
- 互いの学習内容や指導方針を理解し合い、段差や違いに子どもが対応できるよう、連続的に指導を考える
- 互いの良さを認め合い、校長先生のリードの下、意識面・物理面の両方から接続を円滑化する

ではじめて円滑に進みます。意識面としては、小・中学校それぞれに伝統があり、どちらが「良い」「悪い」ではないことに留意してください。批判からは何も生まれません。それぞれが認め合い、「子どものために」という共通の目的の下、互いの良さを部分的に取り入れ合うことが必要です。成功している事例を見ると、それぞれの校長先生がリードして校内の雰囲気づくりをすることの大切さも伝わってきます。

一方、物理面では、定期的に顔を合わせる機会を設けることが出発点です。互いに多忙でしょうが、実際に先生同士が会って話さなければ相互理解は進みません。

理想的な接続の形は、子どもの個人差や地域差によっても異なります。実践が進められている事例を参考にしながら、自校に適した形を模索していただきたいと思えます。

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです